

3-6 美学・西洋美術史

研究・教育活動の概要と特色

美学・西洋美術史研究は、人間の証とでもいうべき感性、創造性に依拠しています。「近代」においてはとくに芸術が、宗教や共同体幻想を代行するまでになっています。だとするとそれにはどのような意味があるのか、を問わなければなりません。その問を具体的な作品にアプローチすることで果たそうとしています。芸術作品が成り立つその前提を疑うという姿勢から、新たな価値観を見いだす作業を「美学」において学べるように努めています。本講座で学ぶ美学は、いわゆる伝統的な理論的美学ではなく、美術史研究を行っていく上での方法論を考える、価値判断の重要性を認識する手段となっています。

一方、美術史学は作品を歴史的コンテクストの中で調べ、現代的な批評の視点でその様式、図像、社会的位置を研究するように努めています。美術史においては、西洋美術全般にわたって様式的分析ばかりでなく、その「イコノロジー」的考察、社会史的分析を視野に入れて芸術家と作品との関係を考察することに主眼を置いています。それに加えこれまでマイノリティーの問題であった、東洋からの西洋美術への影響を取りあげ、その意義を明らかにしていきたい。

I 組織

1 教員数（2009年9月末現在）

教授：1

准教授：2

講師：0

助教：0

教授：尾崎彰宏

准教授：芳賀京子、ロベルト・テッロースイ

2 在学生数

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博 士 前期	大学院博 士 後期	大学院 研究生
20	0	3	9	1

3 修了生・卒業生数

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
05	8	3	0
06	7	4	0
07	8	2	0
08	8	3	1
09	0	0	1
計	31	12	2

*2009年度は、9月末までの数字

II 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2005～2009年度）

1 博士学位授与

1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件 数	論文博士授与件 数	計
05	0	1	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	1	0	1
09	0	0	0
計	1	1	2

*2009年度は、9月末までの数字

1-2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

石鍋真澄、2005年度、『ピエロ・デッラ・フランチェスカ』

審査委員：教授・尾崎彰宏(主査)、教授・長岡龍作、教授・松本宣郎

佐々木千佳、2008年度、『ジョヴァンニ・ベッリーニと十五世紀ヴェネツィア社会』

審査委員：教授・尾崎彰宏(主査)、教授・長岡龍作、教授・泉武夫、
准教授・芳賀京子、准教授・有光秀行

2 大学院生等による論文発表

2-1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
05	0	3	2	0	5
06	1	3	0	0	4
07	0	1	0	0	1
08	2	3	0	0	5
09	2	0	0	0	2
計	5	10	2	0	17

* 2009年度は9月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

2-2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学 会	研究 会	その他	計
05	0	2	6	0	8
06	0	2	0	0	2
07	0	4	1	0	5
08	0	3	1	0	4
09	0	1	0	0	1
計	0	12	8	0	20

* 2009年度は9月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

(1) 論文

岩屋 晶、「ラファエロ《ガラテア》の凱旋をめぐって」、『美術史学』、
第27号、53-74頁、2006年

石澤靖典、「一五世紀フィレンツェにおける美術と地理学—ベルリンギエ
リ『地理学の七日間』をめぐって—」、『文化』、第72巻第3・4号、
29-52頁、2009年

奥田亜希子、「展覧会評「コスメ・トゥーラとフランチェスコ・デル・コッ
サー—ボルソー・デステ時代のフェッラーラ芸術」展」、『美術史学』、
第28号、99-103頁、2007年

加藤奈保子、「カラヴァッジョの少年像の研究」、『鹿島美術研究年報』、
第23号別冊(2005年度)、381-389頁、2006年

- 門田彩、「《聖イルデフォンソ》（イリェスカス、カリダー施療院）をめぐって——ペドロ・サラサール・デ・メンドーサとの関係を中心に」、『美学』、232巻、85-98頁、2008年
- 門田彩、「1600年前後のトレドにおけるエル・グレコ」、『鹿島美術研究年報』、第25号別冊（2007年度）、232-240頁、2008年
- 門田彩、「エル・グレコ作《彫刻家の肖像（おそらくポンペオ・レオーニ）》をめぐる一考察——フェリペ二世の首席彫刻家ポンペオ・レオーニとの関係——」、『美術史学』、第29号、165-178頁、2008年
- 喜田早菜江、「シャルダンの初期風俗画——肖像画と風俗画のジャンル横断をめぐって——」、『美術史学』、第26号、123-144頁、2005年
- 絹川陽子、「展覧会評 サン・ロレンツォ教会における建築家ミケランジェロー——四つの未解決問題——」、『美術史学』、第28号、91-97頁、2007年
- 久保寿子、「ヤン・ファン・エイクの《聖バルバラ》——構図・図像・発想源——」、『美術史学』、第26号、147-171頁、2005年
- 佐々木千佳「ジョヴァンニ・ベッリーニ作《聖なる寓意》の形態の源泉とその創意をめぐって」『美術史学』26号、2005年、87-122頁
- 工藤弘二、「展覧会評 ポール・セザンヌ没後一〇〇周年記念「プロヴァンスのセザンヌ」展」、『美術史学』、第27号、137-148頁、2006年
- 工藤弘二、「セザンヌの水浴図研究」、『鹿島美術研究年報』、第24号別冊（2006年度）、310-321頁、2007年
- 小松健一郎、「コレッジョ作《ウェヌスとクピドとサテュロス》——ニコラ・マッフェイのコレクションと「古代風」作品」、『美学』、第227号、15-28頁、2006年
- 小松健一郎、「展覧会評「コレッジョ」展」、『美術史学』、第29号、215-221頁、2008年
- 小松健一郎、「初期コレッジョとエミリア地方の「早熟な古典主義」——「周縁」の芸術に関する一試論」、『美術史』、第167冊、2009年
- 高橋優季、「ブリューゲル作「月暦図」連作における風景表現をめぐる一考察」、『美術史学』、第27号、77-102頁、2006年
- 二宮洋輔、「ヴァン・ダイクの肖像画における「岩」のモチーフに関する一考察」、『美術史学』、第29号、179-198頁、2008年

- 柳原一徳、「ドラクロワ「サン=シュルピス聖堂聖天使礼拝堂壁画」研究—
写真の視点から」、『鹿島美術研究年報』、第 23 号別冊(2005 年度)、
126-136 頁、2006 年
- 佐々木千佳、「トリヴァルツィアーナ図書館蔵《ラファエーレ・ツォヴェ
ンツォーニの肖像》をめぐる詩人と画家」、『美学』、第 233 号、58-71
頁、2008 年
- 森田優子、「展覧会評 ヴェネト絵画の潮流を見る」、『美術史学』、第
26 号、175-179 頁、2005 年
- 森田優子、「聖ルカの遺体の移送—パドヴァのサンタ・ジュスティーナ聖
堂サン・ルカ礼拝堂をめぐる」、『美術史学』、第 28 号、67-75 頁、
2007 年
- 森田優子、「聖アウグスティヌスの書斎—カルパッチョ作「スラブ人会」
連作をめぐる」、『美学』、第 233 号、2008 年

(2) 翻訳

- 佐々木千佳訳、展覧会カタログ『パルマ—イタリア美術、もう一つの都』（国立西
洋美術館、2007 年 5 月 29 日～8 月 26 日）、読売新聞社、翻訳（第 1 章巻頭論文、
第 1 章 nos.01-06,08-09, 第 2 章 nos.01-06, 第 4 章 nos.03,04）
- 門田彩訳、マーティン・ヘニッグ「古代ローマ世界の彫玉」、展覧会カタ
ログ『カメオ展 宝石彫刻の 2000 年 ～アレキサンダー大王からナポ
レオン 3 世まで～』（箱根 彫刻の森美術館、2008 年 9 月 6 日～10 月
26 日 他）、産経新聞社、2008 年、pp. 20-24.
- 加藤奈保子訳、展覧会カタログ『カメオ展 宝石彫刻の 2000 年 ～アレキ
サンダー大王からナポレオン 3 世まで～』（箱根 彫刻の森美術館、
2008 年 9 月 6 日～10 月 26 日 他）、産経新聞社、2008 年、章解説翻訳
（pp. 42-43, 106-107, 172）.
- 小松健一郎訳、展覧会カタログ『古代ローマ帝国の遺産—栄光の都ロー
マと悲劇の街ポンペイ—』（国立西洋美術館、2009 年 9 月 19 日～12
月 13 日）、国立西洋美術館、2009 年、章解説と作品解説の翻訳（pp.
33-34, 81, 109, 110, 112, 115）
- 絹川陽子訳、展覧会カタログ『古代ローマ帝国の遺産—栄光の都ロー
マと悲劇の街ポンペイ—』（国立西洋美術館、2009 年 9 月 19 日～12

月 13 日)、国立西洋美術館、2009 年、論文と作品解説の翻訳 (pp. 19-27, 125, 126, 131)

(3) 口頭発表

阿部 愛、「カラヴァッジョのコピー制作にかんする考察」、第 58 回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

門田彩、「エル・グレコ作、イリエスカスの《聖イルデフォンソ》にかんする一試案」、第 58 回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

門田彩、「エル・グレコとペドロ・サラサール・デ・メンドーサ～《聖イルデフォンソ》考察より」、スペイン・ラテンアメリカ研究会、2007 年 12 月 8 日

喜田 早菜江、「肖像画としての風俗画、あるいは風俗画としての肖像画—シャルダンにおけるジャンルの横断をめぐって—」、第 56 回美学会全国大会、2005 年 10 月 10 日

絹川 陽子、「中世末期の悪の一表象——ピサのカンポサントの《死の勝利》を中心に——」、第 62 回美術史学会全国大会、2009 年 5 月 24 日

小松 健一郎、「「周辺 (periferia) の画家」—コレッジの形成期における諸流派との関係—」、第 61 回美術史学会全国大会、2008 年 5 月 31 日

「コレッジ作〈ユピテルの愛〉連作と 16 世紀エロティック絵画の潮流」、第 3 回美学会東部会例会、2009 年 10 月 3 日

榊田 亜佐子、「ヒューホ・ファン・デル・フース作ベルリンの《降臨》にかんする一考察」、第 58 回美学会全国大会、2007 年 10 月 7 日

鈴木幸野、「ブレンツォーニ家墓碑におけるピサネッロ作壁画をめぐる考察」、第 59 回美学会全国大会、2008 年 10 月 13 日

武井 敏、「ティントレットとグリッド」、第 57 回美学会全国大会、2006 年 10 月 8 日

高橋 優季、「「悦楽の地」としてのフランドル——ブリューゲル作「月暦画」連作をめぐって」、第 59 回美術史学会全国大会、2006 年 5 月 28 日

二宮洋輔、「ヴァン・ダイクの肖像画における「岩」のモチーフに関する一考察」、第 59 回美学会全国大会、2008 年 10 月 13 日

東山 大奈、「ルーベンス《ガニュメデスと鷲》について」、第 56 回美学会

会全国大会、2005年10月9日

森田 優子、「聖アウグスティヌスの書斎——カルパッチョ作スクオーラ・
ダルマタ連作をめぐって」、第19回美学会東部会例会、2007年11月
24日

3 大学院生・学部生等の受賞状況

なし

4 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5 留学・留学生受け入れ

5-1 大学院生・学部学生等の留学数

2005年度 博士後期課程 計3名 ボローニャ大学（イタリア）、パリ第
一大学（フランス）、マドリード・コンプルテンセ大学（スペイン）

2007年度 博士後期課程 計3名 ドルトムント大学（ドイツ）、フィ
レンツェ大学（イタリア）、ピサ大学（イタリア）

2008年度 博士後期課程 計2名 レンヌ大学（フランス）、ヴェローナ
大学（イタリア）

5-2 留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
09	0	0	0
計	0	0	0

6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
09	0	0	0
計	0	0	0

7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

7-1 専攻分野出身の研究者

- 2005年度 柳原 一徳 島根県立美術館
2006年度 武井 敏 礪山美術館
2007年度 喜田早菜江 志賀高原ロマン美術館
2009年度 工藤弘二 国立新美術館（研究補佐員）

7-2 専攻分野出身の高度職業人

- 2005年度 2名
2006年度 1名
2007年度 1名
2008年度 1名
2009年度 1名

8 客員研究員の受け入れ状況

なし

9 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10 刊行物

『美術史学』（年刊）

1 1 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2005年度～2006年度

美術史学会本部・東支部事務局

2007年度

11月24日 美学会例会 共催：宮城県美術館（於：宮城県美術館）

2008年度

8月2日 イタリア美術特別講演会「メディチ家の考古学コレクション」

1 2 専攻分野主催の研究会等活動状況

[講演会]

・2005年度

特別講演会 2月4日「ギリシア美術への招待ー古代遺跡巡り」芳賀京子（国立西洋美術館リサーチフェロー）

[研究会]

・2007年度

6月21日 若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相ー15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会いー」第一回定期研究会「15-16世紀ヴェネツィアの都市景観について」発表者：佐々木千佳

10月28日 若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相ー15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会いー」第二回定期研究会「佐賀県立名護屋城博物館蔵「肥前名護屋城図屏風」にみる景観表現」発表者：坂本明子

・2008年

6月24日 若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相ー15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会いー」第三回定期研究会「15世紀フィレンツェにおける都市景観図の展開ー都市の理念とF. ロッセリ作《フィレンツェ図》-」発表者：石澤靖典

11月20日 若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相ー15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会いー」第四回定期研究会「鋏形蕙斎筆「江戸一目

「図屏風」について—季節と時間の表現を中心に— 発表者：佐藤琴
・2009年

6月13日 若手研究者萌芽研究育成プログラム「地図と都市景観図にみる異文化受容の様相—15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会い—」第五回定期研究会「西洋古代における都市景観図の成立～なぜ西洋の都市図は無人なのか～」

発表者：芳賀京子

7月10日 美学・西洋美術史特別講義「メディアを通して見た近代日本」（大学間学術協定校ローマ大学「ラ・サピエンツァ」マルコ・デル・ベーネ教授）

10月4日 大学院 GP、東北史学会共催シンポジウム「文書館・博物館のこれからとアーキビスト・キュレーター養成」

10月5日 大学院 GP 共催、西洋美術史特別講演会、インゲボルク・カーダー氏（ミュンヘン大学）「ヨーロッパの石膏像ギャラリー——その歴史と現在——」

11月13日 美学・西洋美術史特別連続講義「マニエリスムの芸術論——アルベルティからカミッロへ」（弘前大学人文学部准教授・足達薫）（科研費「カーレル・ファン・マンデル著『北方画家列伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究」基盤研究（B）による招聘講師）

[土曜会（読書会）]

2005年度 第10回（4月16日）、第11回（5月7日）、第12回（7月30日）、第13回（8月23, 24日）、第14回（12月26日）、第15回（2月27日）

2006年度 第16回（4月8日）、第17回（7月29日）、第18回（9月29日）、第19回（11月4日）、第20回（2月17日）、第21回（3月31日）

2007年度 第22回（10月20日）、第23回（2月28日）

2008年度 第24回（9月28日）、第25回（2月14日）

2009年度 第26回（8月29日）。第27回（9月20日）

[卒論・修論構想発表会]

2005年7月16日

2006年8月2、3日

2007年6月25日、7月17日

2008年7月22、25日

2009年7月13、14日

[研究会]

・2005年度

7月5日 加藤奈保子「17世紀初頭のローマとカラヴァッジョ—1603年頃の活動を中心に」

8月29日 東山大奈「ルーベンス《ガニュメデスと鷲》について」

8月29日 喜田早菜江「肖像画としての風俗画、あるいは風俗画としての肖像画—シャルダンにおけるジャンル横断をめぐって—」

10月10日 石澤靖典「サンドロ・ボッティチェッリ研究」

・2006年度

・2007年度

4月24日 奥田亜希子「フラアンジェリコ研究《十字架降下》をめぐって」

4月24日 絹川陽子「ピサのカンポ・サントの壁画《死の勝利》に描かれた、人間の腐敗した死体の意味」

1月22日 榊田亜佐子「ヒューホ・ファン・デル・フースの後期作品について」

1月22日 阿部愛「ローマにおけるカラヴァッジョ芸術の広がり——私的コレクションのための宗教画を中心に」

・2008年度

7月25日 榊田亜佐子「ヒューホ・ファン・デル・フース作《降誕》について」

7月25日 伊藤麻衣「ルーカス・クラナハ（父）《聖カタリナ祭壇画》」

7月25日 阿部愛「ローマを中心としたカラヴァッジョ芸術の広がり——ロンドン、ナショナル・ギャラリー所蔵《エマオの晚餐》を中心

に――」

1 3 組織としての研究・教育活動に関する過去 5 年間の自己点検と評価

2004 年度をもって一名の教員が定年により退職し、05 年度は教授 1 名と助教 1 名体制になった。そのため学部・大学院を合計すると 50 人近い学生を抱える研究室としては、教育・研究のヴァリエーションの幅が小さくなったことは否めない。しかし、06 年より助教授を迎え、教育的な専門領域が充実するようになった。さらに 09 年度からは、「美学」を専門とするイタリア人准教授が加わりスタッフの充実がはかられた。

教育活動としては、大学院生の課程博士論文の授与数がこの 5 年間に 1 名しかいなかったのは、いかにも少なすぎる。しかもその学生は社会人入学者であり、現役の学生の授与者はいなかった。博士課程後期に進学する院生には、博士論文の提出を強く促しているが、現実には、なかなか思うような成果に結びついていない。

その理由はいくつか考えられる。一つは、全国学会で発表後、最初の論文を作成するところまでは、ある程度順調にいくが、そのあと、留学の準備やそして留学によって、実際に論文を作成するよりも、作品を見てまわり、文献を調べたり調査したりする充電期間が予想以上に長くかかっていることがあげられる。

もう一つは、昨今の学生の場合、ロールモデルの存在が非常に大きい。博士論文提出者の理想的なロールモデルとなる学生が現在まで研究室にあらわれていない。その理由としては、論文を書くと言うことの意味づけが今ひとつ諒解されていないのではないか。本研究室でも、博士課程に進学した学生大半が、それぞれの専門領域におうじて海外の研究機関へ留学をしている。留学前後と比較すると、当該学生の語学力には格段の進歩がみられることは確かだ。作品の調査能力の進化にも一日の長が見うけられる。しかし、人文学にとって不可欠ともいえる、問題意識――なぜこの問題に取り組むのか、という必然性が深化しているとは言い難い。これがやはり、帰国後、留学と研究成果の発表とに直接的な結びつきがやや欠ける理由ではないか。

こうした研究・教育上の問題点は早くから意識されており、専攻分野主催の研究会などの活動をできるかぎり積極的に行ってきた。授業や演習とは別に、院生をレポーターとして、美術史という分野の視点に立って美術史関連分野の

書物を読んでその問題点と課題を発表し参加者で議論する研究会を定期的開催している。そうすることで、ややもすると自分の専門領域の狭い範囲に閉じこもりがちな院生の問題意識を活性化させる努力をしている。

さらには、学部生、院生を交えた作品の調査・研修旅行を毎年企画し、作品への接し方や問題意識など日常を脱したところで自由に語り合うことも行っている。しかし、成果という点からすると、なお充分とは言い難い。研究指導において、学生のモチベーションをさらに高めていくことが、今後の院生指導の課題である。

最後に学生の就職にふれておきたい。学部卒業生の就職状況は、公務員、一般企業など、業種はまちまちであるが、それぞれ積極的に活動しおおむね良好である。院生の場合も、博士課程の前期修了者の場合、とくに専門領域にこだわらない形で就職を希望するものは、出版、マスコミなどそれぞれの希望に合わせて就職している。美術館、大学教員など専門職を希望する院生は、博士課程後期に進学しているが、状況は10年前とくらべると一段と厳しくなった。このあたりの学生支援をどのように進めていくかが課題である。

Ⅲ 教員の研究活動（2005～2009年度）

1 教員による論文発表等

1-1 論文

尾崎彰宏「画廊画の誕生——絵画の自己言及性をめぐって」、『東北大学歴史資料アーカイヴの構築と社会的メディア化』、平成16年度東北大学教育研究共同プロジェクト成果報告書、2005年、pp.70-82.

尾崎彰宏「絵を読むこと——隠された世界の発見」『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、2005年、pp.166-170.

尾崎彰宏「レンブラントと17世紀ネーデルラントの「蒐集」に関する研究」、平成15年～16年度学研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2005年、15pp.

尾崎彰宏「男」を演じる女たち——17世紀オランダ風俗画におけるペトルカの影」、栗原隆編『芸術の始まる時、尽きる時』、東北大学出版会、2007年、pp.205-234.

尾崎彰宏「レンブラントの懐疑——墮落と自由のあいだ」、野家啓一編『ヒトと人のあいだ』、岩波書店、2007年、pp.63-86.

- 尾崎彰宏「レンブラントと17世紀オランダ美術における女性表現に関する研究」、平成17年～19年度学術研究費補助金・基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 2008年、15pp.
- 尾崎彰宏「17世紀オランダ風俗画にみる「妻の鑑」」、栗原隆編『形と空間の中の私』、東北大学出版会、2008年、pp.194-214.
- 尾崎彰宏「フェルメールのドラマツルギー」、『ユリイカ』2008年8月号、pp.187-195
- 尾崎彰宏「ネーデルラントの素描力と古代への挑戦——ホルツィウス《ファルネーゼのヘラクレス》」『線の巨匠たち展』、東京藝術大学附属美術館、2008年、pp.33-39.
- 尾崎彰宏「オランダ美術における聖と俗——静物画の勃興」『西洋美術研究』No. 15、2009年
- 芳賀京子「越境するアテナイ人彫刻家」『西洋美術研究』No. 14、2008年、pp. 12-32.
- 芳賀京子「フェイディアス作《アテナ・パルテノス》(一) 賦与された機能と感得される神性」『美術史学』、29号、2009年、pp. 143-164.
- 芳賀京子「ローマ世界のギリシア彫刻——人の像と神の像——」展覧会カタログ『古代ローマ帝国の遺産——栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ——』(国立西洋美術館、2009年9月19日～12月13日)、東京新聞、2009年、pp. 179-184.
- Kyoko Sengoku-Haga, “Sculpture greche nel mondo romano: statue profane e statue divine”, in: *L’eredità dell’impero romano* (catalogo della mostra, The National Museum of Western Art, 19 settembre 2009 – 13 dicembre), Tokyo 2009 (上記の論文のイタリア語訳)
- Kyoko Sengoku-Haga, Masanori Aoyagi, “Due statue marmoree da Somma Vesuviana: Dioniso e la Peplophoros,” *Amoenitas* 1 (2009) (出版予定)
- 芳賀京子「古代ギリシア・ローマの横たわる裸婦」『ヴィーナスをめぐる論文集(仮題)』所収、三元社、2009年(出版予定)
- 芳賀京子「古代世界の地図と都市図」『地図と都市景観図にみる異文化受容の様相(仮題)』所収、東北大学出版会、2010年3月(出版予定)

- Roberto Terrosi, “La *governance* dell’arte contemporanea (The Governance of Contemporary Art)”, *Agalma*, n.9, 2005, pp.57-62
- Roberto Terrosi, “Four Questions Answered: Interview with Joseph Kosuth (English text available)”, *Agalma*, n.9, 2005, pp. 69-81.
- Roberto Terrosi, “Gyaru Power. Un confronto tra l’immagine dell’adolescente seducente in Giappone e in Occidente”, *Agalma*, n.12, 2006, pp. 61-74.
- Roberto Terrosi, 「サヴィーニオの哲学」, *Trans-Cultural Studies*, vol. 10, 東京外国語大学, Tokyo, 2006, pp.177-189
- Roberto Terrosi, “Ex-humans. Sull’essenza del postumano” (*Ex-humans. On the Essence of Post-human*), *Kainos*, 2 annuario, Punto Rosso Ed, Milano, 2007, pp. 57-72.
- Roberto Terrosi, “Architettura atopica. L’esperienza dell’architettura olandese contemporanea” (*Atopic Architecture. The Experience of Contemporary Dutch Architecture*). *Agalma*, n.13, 2007, pp. 57-61.
- Roberto Terrosi, *Estetica del restauro (Aesthetics of Restoration, Japanese text)* 『イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史——欧米との比較から』, edizioni dell’Università di Kyoto, 2007, pp. 76-101.
- Roberto Terrosi, “La storia plurale dell’arte. Intervista a Atsushi Okada”, *Agalma*, n. 16, 2008, pp. 83-93.
- Roberto Terrosi, “L’immagine in Occidente e in Estremo Oriente” (Image in the West and in the Far East), in *L’immagine in questione (Questioning image)*, ed. By V. Cuomo, Aracne, Roma, 2009, pp. 61-74
- Roberto Terrosi, “Il nudo indeterminato. La questione del nudo in Giappone”, in *Nudità*, Annuario *Kainos*, n. 4, Milano, 2009, pp. 77-92.
- Roberto Terrosi, “The Muse of History. The Historical Consciousness in 19th Century Italian Art Starting from Foscolo and Cuoco”, 『19世紀学研究』、第2号、2009年2月、39-49頁
- Roberto Terrosi, “Il gioco dell’arte”, *Agalma*, n. 17, Milano, 2009.
- Roberto Terrosi, “Futurismo e postumano”, in *A Century of Futurism: 1909-2009* AdI, University of Chapel Hill, North Carolina, USA, 2009 (being published)
- Roberto Terrosi, “Chiasms in Art”, in *Chiasmatic Encounters: Art, Ethics, Politics*, Lexington Books, Lanham, MD, pp.37-46 (being published)

1-2 著書・編著

尾崎彰宏『フェルメール』、小学館、2006年、128pp.

尾崎彰宏『レンブラント、フェルメールの時代の女性たち—女性像から読み解くオランダ風俗画の魅力』、小学館、2008年、263pp.

芳賀京子『ロドス島の古代彫刻』、中央公論美術出版、2006年、697pp.

芳賀京子（編集協力）、展覧会カタログ『ウルビーノのヴィーナス』（国立西洋美術館 2008年3月4日～5月18日）、読売新聞社、2008年
青柳正規、芳賀京子（監修）『古代ローマ帝国の遺産——栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ——』（展覧会カタログ、国立西洋美術館、2009年9月19日～12月13日）、国立西洋美術館、2009年

Francesco Lizzani, *La quindicesima roccia. Stazioni di un viaggio in Giappone*, Aracne Editrice 2007.

Roberto Terrosi, *Storia del concetto d'arte. Un'indagine genealogica (The History of the Concept of Art. A Genealogical Inquiry)*, Mimesis, Milano, 2006, pp. 160.

1-3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

(1) 翻訳

尾崎彰宏「史料翻訳 カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（7）」、『東北大学文学研究科研究年報』、2005年、pp.1-24.

尾崎彰宏「史料翻訳 カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（8）」（共訳）、『美術史学』27号、2006年、pp. 121-136.

尾崎彰宏「史料翻訳 カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（9）」（共訳）、『美術史学』28号、2007年、pp.77-96.

尾崎彰宏（日本語監修）『レンブラントの版画』、名古屋ポストン美術館、2007年、104pp.

尾崎彰宏「史料翻訳 カーレル・ファン・マンデル著『絵画の書』（1604）（10）」（共訳）、『美術史学』28号、2008年、pp. 199-213.

芳賀京子訳、展覧会カタログ『世界遺産・博物館島 ベルリンの至宝展——よみがえる美の聖域』（東京国立博物館 2005年4月5日～6月12日）、朝日新聞社、TBS、東映、2005年、作品解説などの翻訳（nos. 52-73、

84-121; pp. 92, 128, 142)

芳賀京子、日向太郎訳『ラオコーン——様式と名声——』（サルヴァトーレ・セッティス著）三元社、2006年

芳賀京子訳、ルチア・ピルツィオ・ビローリ・ステファネッリ「ローマの宝石彫刻——18世紀から19世紀の興隆」、展覧会カタログ『カメオ展 宝石彫刻の2000年 ～アレキサンダー大王からナポレオン3世まで～』（箱根 彫刻の森美術館、2008年9月6日～10月26日 他）、産経新聞社、2008年、pp. 20-24.

芳賀京子・尾関幸訳、パウル・ツァンカー「ローマ帝政期の墓における市民の自己表現」、小佐野重利・木下直之編『死生学4 死と死後をめぐるイメージと文化』、東京大学出版会、2008年、pp. 43-75.

芳賀京子訳、展覧会カタログ『ルーヴル美術館展 美の宮殿の子どもたち』（国立新美術館、2009年3月25日～6月1日）、朝日新聞社、作品解説などの翻訳（nos. 9, 12-14, 29, 33-37, 42, 55, 57-58, 80-81, 89, 91, 99, 157-167; pp. 137, 212-214）

Roberto Terrosi, translation of Michel Makarius, *Il corpo a rischio*, Agalma, marzo 2005, n. 9, pp. 45-50.

Roberto Terrosi, translation of Peter Burke, *Tropicalizzazione, tropicalismo, tropicologia. Il contributo di Gilberto Freyre*, Agalma, settembre 2005, n. 10, pp. 10-19.

Roberto Terrosi, translation of Kaori Chino, *Il gender nell'arte giapponese*, Agalma, marzo 2006, n. 11, pp. 8-20.

（2）書評

尾崎彰宏「幸福輝『ピーテル・ブリューゲル——ロマネイズムとの共生』（ありな書房、2005年）」図書新聞 2005年4月23日号

芳賀京子「A. Stewart, *Attalos, Athens, and the Akropolis: The Pergamene 'Little Barbarians' and their Roman and Renaissance Legacy*」『西洋古典学研究』55、2007年、pp. 164-166

Roberto Terrosi, review of Nathalie Heinich, *La sociologia dell'arte*, Agalma, marzo 2005, n. 9, pp. 103-106.

Roberto Terrosi, review of Renato Barilli, *Bergson. Il filosofo del software*,

Agalma, settembre 2005, n. 10, pp. 126-128.

(3) 解説

尾崎彰宏「工房」 pp.96-101、「レンブラント・ファン・レイン——自己成型への挑戦」 pp.154-164、藤枝・谷川・小澤編『絵画の制作学』日本文教出版、2007年

尾崎彰宏「フェルメール——光の粒子のドラマ」『dankai パンチ』、2008年6月号、pp.14-32

尾崎彰宏、「レンブラント・ファン・レイン、《ウルカヌスに捕らえられたマルスとヴィーナス》」、『線の巨匠たち展』、東京藝術大学附属美術館、2008年、no. 28.

芳賀京子、展覧会リーフレット「ソンマ・ヴェスヴィアーナ出土の2体の大理石像」ディオニュソスとペプロフォロス ——東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果——』（東京大学総合研究博物館、2005年）

芳賀京子「作品の記述と作品を見る目（古代ギリシア・ローマ）」『雲母』（京都造形芸術大学通信教育部補助教材）2006年8月号、pp. 61-64

芳賀京子「ギリシア・ローマの美術」、展覧会カタログ『ほほえみの考古学展』（古代オリエント博物館、2007年3月17日～7月1日 他）、東京新聞、2007年、pp. 16-17、および作品解説、pp. 124-130.

芳賀京子「ギリシアのアルカイック美術」『オリエンテ』（古代オリエント博物館情報誌）、No. 35、2007年7月、pp. 7-10.

芳賀京子「《夜の女王》とフクロウ」『Herend Owl Club 通信』、No. 5、2007年12月、pp. 1-2.

芳賀京子「ギリシア、アルカイック美術の魅力」『學鏡』、丸善株式会社、2008年、pp. 18-21.

芳賀京子「ギリシアのヘレニズム美術 『グローバル美術の誕生』」、展覧会カタログ『ヘレニズムの華 ペルガモンとシルクロード』（岡山市立オリエント美術館、2008年9月6日～11月3日 他）、中近東文化センター附属博物館、2008年、pp. 31-39.

芳賀京子『古代ローマ帝国の遺産——栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ——』（展覧会カタログ、国立西洋美術館、2009年9月19日～12月

13 日)、国立西洋美術館、2009 年、解説コラム (pp. 36, 44, 50, 72, 76, 82, 88, 104, 108, 116, 124, 132, 146)

(4) その他(研究報告・発掘報告)

Kyoko Sengoku-Haga, “VRC01 Preliminary Report. 3. Finds. (10) Marble sculpture,” 『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要)、第 18 号、2005 年、pp. 78-79.

Kyoko Sengoku-Haga, “VRC02-04 Preliminary Report. Finds. Sculpture,” 『文化交流研究』(東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要)、第 19 号、2005 年、pp. 92-94.

芳賀京子「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』——ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ」『鹿島美術研究年報』23 号、2006 年、pp. 71-80

1-4 口頭発表

尾崎彰宏「17 世紀オランダに見る近代——レンブラントとフェルメールをめぐって」、科研費「新旧論争」ならびに学長裁量経費受託『藝術の始まる時、尽きる時』制作プロジェクト夏季、新潟大学、2006 年 8 月 19 日

尾崎彰宏「レンブラント、フェルメール絵画に見る女性たち」夏季公開研究会、新潟大学 2008 年 8 月 29 日

尾崎彰宏「オランダ美術における聖と俗——静物画の勃興」第 1 回美学会東部会例会、慶應義塾大学、2009 年 6 月 6 日

尾崎彰宏「「新世界」の驚異——アルベルト・エックハウトの静物画をめぐって」、筑波大学教授、研究代表・五十殿利治氏の科研費「芸術受容」研究会、共立女子大学、2009 年 9 月 27 日

芳賀京子「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』——ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ——」鹿島美術財団研究発表会、2007 年 5 月 11 日

芳賀京子「古代の人々の神像へのまなざし ——《アテナ・パルテノス》の場合——」美学会例会、2007 年 11 月 24 日

芳賀京子「2003 年出土の 2 体の大理石像 ——《ディオニュソス》と《ペ

- プロフォロス》」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」、2008年2月11日
- 比留間英、藤原研人、鎌倉真音、高松淳、芳賀京子、池内克史「古代ローマ彫像の3次元形状解析による考古学調査」、じんもんこん 2008：人文科学とコンピュータシンポジウム、2008年12月21日
- 芳賀京子、鎌倉真音、池内克史「古代カンパニア地方の2つの彫刻工房——彫刻家ステファノスを3次元計測でつかまえる——」、国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」、2009年2月11日
- Roberto Terrosi, *Alberto Savinio: tra l'anima delle cose e lo sparagmos (Alberto Savinio: the Soul of Things and the Sapargmos)*, Tokyo University, Tokyo, 2005年12月17日
- Roberto Terrosi, *Kristeva and the Surrealist Paradigm (English Text)*, XV IPS (International Philosophical Seminar), Kastelruth, Südtirol, Italy, 2005年7月10日
- Roberto Terrosi, *Chiasms in Art (English Text)*, IAPL (International Association for Philosophy and Literature), “Chiasmatic Encounters”, Helsinki, Finland, 2005年6月2日
- Roberto Terrosi, *La sinestesia e rapporto tra le arti (Synaesthesia and relationships among arts)*, in “Arte Sinestetica”, University of Rome “Tor Vergata” (video transmitted by Rai Doc, 27 June 2005), Rome, 2005年5月20日.
- Roberto Terrosi, *Estetica, visual studies e visual culture (Aesthetics, Visual Studies and Visual Culture)*, University of Trento, SIE (Società Italiana di Estetica), Osservatorio di “Nuova Estetica”, Trento, Italy, 2006年12月15日
- Roberto Terrosi, *Nancy: Le Monde [Politique] et les Mondes (English Text)*, XVI IPS (International Philosophical Seminar), Kastelruth, Bolzano, Italy, 2006年7月6日
- Roberto Terrosi, *The Incompleteness of Art (English Text)*, IAPL (International Association for Philosophy and Literature), University of Freiburg, Germany, 2006年6月8日
- Roberto Terrosi, *La moda in Giappone (Fashion in Japan)*, in “Geografie del

- vestire”, Università Cattolica di Milano, Milano, 2006 年 4 月 24 日
- Roberto Terrosi, *Rappresentazione e cultura (Representation and Culture, Japanese Text)*, Kyoto University, Kyoto, 2006 年 3 月 9 日
- Roberto Terrosi, *L'identità del ritratto (The Identity of Portrait, with Japanese translation)*, 京都大学、京都、2007 年 12 月 8 日
- Roberto Terrosi, 「歴史のミューズ：フォスコロの詩学以降、19 世紀イタリア芸術における歴史意識」(*La musa della storia. La coscienza storica nell'arte italiana del XIX secolo a partire dalla poetica di Ugo Foscolo*), Institute for the Study of the 19th Century Scholarship, Nigata, Japan 2007 年 11 月 18 日
- Roberto Terrosi, *Out of Man, Out of Nature: The Controversial Essence of Technik (English Text)*, XVII IPS (International Philosophical Seminar), Kastelruth, Südtirol, Italy. 2007 年 7 月 8 日
- Roberto Terrosi, *The Essence of Posthuman (English Text)*, Chapel Hill University, North Carolina, USA, 2007 年 1 月 30 日
- Roberto Terrosi, *The Shadow of Freedom: Liberty and Liberation between West and East, Subject and Environment (English Text)*, Seoul National University, XXII World Congress of Philosophy, Seoul, Korea. 2008 年 7 月 31 日
- Roberto Terrosi, *Giuseppe Castiglione and Cultural Studies (English Text)*, RMIT University, IAPL, Melbourne, Australia, 2008 年 7 月 2 日.
- Roberto Terrosi, *Giorgio Agamben and the Declensions of Violence*, Kastelruth, Bolzano, Italia, 2009 年 7 月 4 日

2 教員の受賞歴 (2005~2009 年度)

- 芳賀京子、鹿島美術財団賞 (2006 年度)
- 芳賀京子、地中海学会ヘレンド賞 (2006 年度)

IV 教員による競争的資金獲得 (2005~2009 年度)

(1) 科学研究費補助金

平成 17 年~19 年度

尾崎彰宏 (研究代表者) 平成 16 年~17 年度 課題番号:17520076 基盤

研究(C)(2)研究代表者：尾崎彰宏 「レンブラントと17世紀オランダ美術における女性表現に関する研究」 36,000,000円（3年間総額）

平成20年～22年度

尾崎彰宏（研究分担者）「空間における形の認知を介した「主体」の存立の基底に見る感覚の根源性についての研究」 課題番号：20320003
基盤研究（B）

平成21年度

尾崎彰宏（研究代表者）「カーレル・ファン・マンデル著『北方画家列伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究」基盤研究（B） 課題番号：21320026

平成17年度

芳賀京子 平成17年度 研究成果公開促進費『ロドス島の古代彫刻』中央公論美術出版、2006年2月出版 3,700,000円

平成19年～21年度

芳賀京子（研究代表者） 平成19年～21年度 課題番号:19520088 基盤研究(C)(2)研究代表者：芳賀京子「古代ローマにおけるギリシア人彫刻工房の研究」 2,900,000円（3年間総額）

平成20年度

芳賀京子（連携代表者）「像（イメージ）の生動化についての比較美術史的研究」 課題番号：20320022 基盤研究(B)

平成21年度

芳賀京子（研究分担者）「カーレル・ファン・マンデル著『北方画家列伝』の成立と影響に関する比較芸術論的研究」基盤研究（B） 課題番号：21320026

（2）その他

平成17年度

芳賀京子（研究代表者） 平成17年度鹿島美術財団「美術に関する研究調査」助成、「古代ローマ世界の『マント式ヘルマ柱』——ローマ人によるギリシア美術のパトロネージ」 550,000円

芳賀京子・佐々木千佳（研究代表者）「東北大学若手研究者萌芽研究育成プログラム」（総長裁量経費）「地図と都市景観図にみる異文化受容の様

相—15世紀から17世紀におけるアジアとヨーロッパの出会い— 5,000,000円(3年間総額)

V 教員による社会貢献(2005~2009年度)

- 尾崎彰宏「西洋美術への招待」有備館講座「歴史」2005年8月13日
- 尾崎彰宏「聖と俗のあいだ—オランダ美術の魅力」宮城県美術館アート・ホール、2008年10月26日
- 尾崎彰宏「素描の魅力—画家のアトリエをめぐって」秋田公立工芸短期大学、2008年12月22日
- 尾崎彰宏「自由へのまなざし(美の十選)」、日本経済新聞朝刊、2009年(1月22日、1月23日、1月26日、1月27日、1月29日、1月30日、2月2日、2月3日、2月5日、2月6日)
- 尾崎彰宏「レンブラントとフェルメールの時代のオランダ絵画」にいがた市民大学講座、生涯学習センター、2009年6月19日
- 芳賀京子「ソンマ・ヴェスヴィアーナの2体の彫像とローマ人によるギリシア文化の受容」『ディオニュソスとペプロフォロス展—東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』講演会、2005年10月15日
- 芳賀京子「ギリシャ—デルフォイ、アテネ、デロス—」シルクロード講座『シルクロードの遺跡と都市』、2005年10月22日
- 芳賀京子「古代ギリシア・ローマにおける造形作品に関する記述—ひとびとはどのように美術品を眺めたのか?」京都造形芸術大学公開セミナー、2005年10月26日
- 芳賀京子「ギリシアのアルカイック美術」古代オリエント博物館友の会講演会、2007年3月17日
- 芳賀京子「《ラオコーン》—ギリシア美術からローマ美術へ—」中央大学市民講座、2007年6月2日
- 芳賀京子「美術にみる古代ギリシア人の生と死」有備館講座、2007年7月14日
- 芳賀京子「ギリシャのアルカイック美術」岐阜市立歴史博物館講演会、2007年9月16日
- 芳賀京子「ラオコーンの名声と謎」東北芸術工科大学公開講座、2007年10

- 月 27 日
芳賀京子「古代ギリシア・ローマの美術を見る」NHK 文化センター、2007
年 10 月より隔週（現在に至る）
- 芳賀京子「古代美術における横たわる裸婦」国立西洋美術館特別講演会、
2008 年 3 月 15 日
- 芳賀京子「ギリシアのヘレニズム美術」、岡山市立オリエント美術館特別
講演会、2008 年 9 月 27 日
- 芳賀京子（パネリスト）、中近東文化センター主催『ペルガモンとシルク
ロード展』記念シンポジウム「アレクサンドロスは日本に何をもたら
したのか」、2008 年 11 月 12 日
- 芳賀京子「ローマ人とギリシア美術～3次元計測で明らかになる古代彫刻
工房の実態～」みやぎ県民大学、2009 年 9 月 19 日
- 芳賀京子「古代ローマ帝国の遺産展——栄光の都ローマと悲劇の街ポンペ
イ——①～⑩」、東京新聞、2009 年 9 月 24 日～10 月 3 日
- 芳賀京子「ローマ世界の美術」、国立西洋美術館特別講演会、2009 年 10
月 24 日
- Roberto Terrosi, *Hermann Nitsch*, Kyoto University of Art and Design, Kyoto,
2005 年 12 月
- Roberto Terrosi, *Leonardo e la filosofia del Rinascimento* (Leonardo and the
Philosophy of Renaissance), “Piazza Italia”, Komaba Museum, Tokyo
University, Tokyo, 2007 年 5 月 26 日
- Roberto Terrosi, *L'immagine in Occidente e in Oriente* (The Image in Western
and Oriental Civilization), conferences-seminar “La fine dell'epoca
dell'immagine del mondo”, Pompei (Napoli), Pompeilife, 2007 年 3 月 7 日
- Roberto Terrosi, *La cultura italiana del giardino e il Giappone* (*The Italian
Garden's Culture and Japan*), Italian Cultural Institute, Kyoto, 2009 年 5 月
22 日

VI 教員による学会役員等の引き受け状況（2005～2009 年度）

尾崎彰宏

美術史学会委員 2003 年～07 年、09 年

美学会委員 2004 年 10 月から現在に至る。

大阪大学大学院文学研究科・文学部外部評価委員、2008年度。

芳賀京子

美術史学会委員 2007年～2009年。

美学会幹事 2007年から現在に至る。

京都ギリシア・ローマ美術館評議員 2006年7月から現在に至る。

VII 教員の教育活動 (2009年度)

(1) 学内授業担当

1 大学院授業担当

教授 尾崎彰宏

通年 美学・西洋美術史特論

通年 美学・西洋美術史研究演習

通年 美学・西洋美術史研究実習

通年 美学・西洋美術史課題研究

准教授 芳賀京子

通年 美学・西洋美術史研究演習

通年 美学・西洋美術史研究実習

通年 美学・西洋美術史課題研究

2 学部授業担当

教授 尾崎彰宏

前期 美学・西洋美術史各論

前期 美学・西洋美術史基礎講読

後期 美学・西洋美術史概論

通年 美学・西洋美術史実習

通年 美学・西洋美術史演習

准教授 芳賀京子

前期 美学・西洋美術史概論

後期 美学・西洋美術史各論

後期 美学・西洋美術史基礎講読

通年 美学・西洋美術史実習

通年 美学・西洋美術史演習

3 共通科目・全学科目授業担当

ロベルト・テッロースィ、通年・イタリア語

(2) 他大学への出講 (2005~2009年度)

教授 尾崎彰宏

2005年度 岩手大学人文社会科学部 (集中)、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 (集中)

2006年度 岩手大学人文社会学部 (集中)

2008年度 岩手大学人文社会学部 (集中)

准教授 芳賀京子

2005年度 愛知大学文学部 (半期)、大阪成蹊大学芸術学部 (半期)、京都造形芸術大学通信教育部 (集中)

2006年度 愛知大学文学部 (半期)、大阪成蹊大学芸術学部 (半期)、京都造形芸術大学通信教育部 (集中)、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 (集中)

2007年度 大阪大学大学院文学研究科・文学部 (集中)